

2 コラム RAMPWAY
泉 麻人

特集 レジリエンス

5 強靱な国土をつくる
政策研究大学院大学
政策研究センター所長・アカデミックフェロー
森地 茂

9 ポジティブな防災へ
NHK盛岡放送局 放送部副部長
二宮 徹

13 データ物語
東日本大震災後の
地震防災対策の進展

14 Taste of the Season
森下典子

16 首都高HEADLINE

18 business essay
宮本武蔵に見習う防災原理
月尾嘉男

20 つくる人まもる人
首都高速道路株式会社
大西孝典

22 高速百景 中野正貴

cover photo by Kōji Arimitsu
contents produced by
Metropolitan Expressway Company Limited

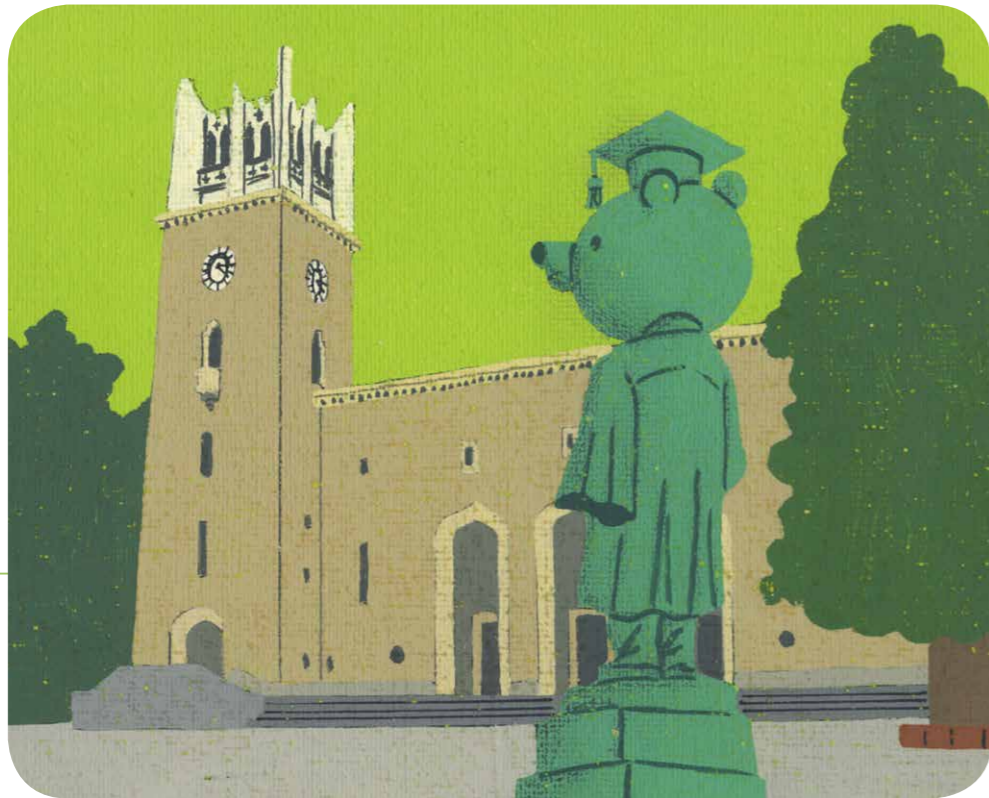


illustration by Takao Nakagawa

column | RAMPWAY 26

首都高名所案内
都の西北は
茗荷の産地
コラムニスト
泉 麻人

首都高速の早稲田の出口は思い出深い。80年代の初め、雑誌の編集部に勤めていた時代、入稿や校了で深夜になると会社のタクシー券を使って車で帰宅することができた。その当時、落合の方に住んでいた僕はだいたいこの早稲田で高速を降りて、新目白通りを直進して家路についた。とくに夜空が白んでくる時分、江戸川橋の所で左に枝

分かれして、江戸川公園の緑を横目に神田川の上から新目白通りの方へ下っていく感じは爽快だった。
その江戸川公園の所からずっと奥へ続く、神田川左岸の台地には椿山荘をはじめ、永青文庫や芭蕉庵……風光明媚な東京名所が存在している。永青文庫のある一帯は細川家の下屋敷だった所だが、見晴らしの良い台地の崖づた

いには江戸の大名屋敷が並んでいた。そんな大名たちから、見晴らされたいたのが低地に広がる早稲田の地域。実際、早生の稲田があったのかどうかは定かではないけれど、田んぼが広がる田園地帯だったのだろう。古地図を眺めると、明治中頃のものまで正に早稲田な田んぼマークに埋めつくされている。田山花袋が大正の初め頃に、およそ30年前の東京風景を回想した随筆「東京の三十年」に牧歌的な早稲田の景色が描写されている。

夫という収集家が集めたマンガ本専門の図書館、数を記してもピンとこないかもしれないが、単行本が約10万5千冊、雑誌が約6万7千8百冊、とHPに書かれている。僕がよく探すのは昭和30年代頃の少年マンガ誌だが、他で見つからないレアなやつも、ここにくればまずヒットする。
そして、鶴巻町の中央を早稲田大学に向かって延びていく、早大通りは好みの道だ。真ん中にケヤキが目につくグリーンベルトが続く景色がとてもいい。ほんのひと頃まで、この道ぞいに戦前からやっているような古いビリアード屋があつて気に入っていたのだが、いつしか新式のビル建てに変わってしまった。

「早稲田から鶴巻町へ出て来るところは、一面の茗荷畑で、早稲田の茗荷と言えば、野菜市場にもきこえたものであった。私たちはその茗荷畑の中に細く通じて未は野の雑木林の中に入って行く路をよく歩いた。時にはまた、婆さんがその取り立ての茗荷を籠に入れて負って売りに来た」

文脈から察して、冒頭の早稲田は早稲田大学そのものを指しているようだが、茗荷の産地だったとは。そうか、距離的に見て、あの茗荷谷でも実際茗荷がよく採れた時代だったのだろう。

ちょうど高速の出口の所の交差点に鶴巻町の表示が出ているが、この角の雑居ビルに「現代マンガ図書館」というのがあつて、時折利用する。内記稔

どこの学生街からも古い喫茶店が姿を消しているが、早大の正門前から馬場下町の方へ向かう道には「ぷらんたん」という山小屋調の古典的喫茶店がまだ健在だ。こういう佇まいの喫茶店に入ると、思わずウインナーコーヒーを注文したくなる。

いずみ あさと / 1956年、東京都新宿区生まれ。慶應義塾大学商学部卒業。79年、東京ニュース通信社に入社。『週刊TVガイド』などの編集者を経て、フリーのコラムニスト。近著に『大東京23区散歩』（講談社）がある。